

効果的な「んです」教授法の一試案

鹿浦佳子

小村親英

要旨

日本語初級文法項目「～んです」は、早い段階で学習するものであるにもかかわらず、学習者には実際の会話で容易に取り入れられないものの一つである。この文型には何らかの「前提」となる発話条件が想定されている場合が多く、文脈や状況によってその「発話意図」がさまざまに想起され、「～んです」の用法が多種多様に異なってしまうからである。本学留学生別科の学習者を対象に行った調査でも、前提条件として設定した場面から、「～んです」との繋がりを理解し、適切に使える学生が少なかった。そこで、本稿では、この多岐にわたる用法を持つ「～んです」の使い方を網羅的に一度に教えるのではなく、前提条件との繋がりにから、話し手と聞き手の共有情報を明らかにし、そこから想起される「発話意図」のわかりやすいものから小出しにして教えるという教授法を提案するものである。

【キーワード】 のだ (んです) ・発話意図 ・ティーチャートーク (teacher talk) ・

モダリティ ・視覚化

1 はじめに

日本語文法項目の一つである「～んです」(のだ) は日本人の普段の日常会話で頻繁に使われるものの一つである。日本人は無意識のうちに「～んです」を多用し、その「～んです」が持つ役割に注意を向けることなく発話を行っている。例えば、「バーゲンで買いました」と「バーゲンで買ったんです」の使い方の違いについて、

深く考えることもなく、その発話場面の状況から判断し、その場面に適したどちらかを無意識のうちに選択し会話を進めている。

この「～んです」が対話の中で適切に発話されるためには、話し手と聞き手が共有する何らかの共有情報が前提条件として必要になってくる¹。例えば、食卓で二人のうち一人が料理を食べようとしないという場面を考えてみると、その場で話し手と聞き手が共有する情報（この場合、「食べようとしない」という事実が「前提」として把握されて初めて、「どうしたんですか」とか「食べないんですか」という「～んです」を使う質問文として出てくる。このように前提条件として設定された場面と「～んです」の繋がりが把握できていなければ、適切に発話ができなくなってしまう。

2 「～んです」用法の広がり

「～んです」の使い方の例を様々な使用場面との関わりから設定し、その用法の違いを明らかにしようとする努力は日本語教師・研究者の間でなされてきた（庵、2013: 庵（他）、2000: 中野、2009: 野田、2002: 山本、2003）。例えば、『教師と学習者のための日本語文型辞典』（1998）によれば、「～んです」（「のです」「のだ」を含め）の用法は次のようにまとめられている。

① 説明

「遅くなってすみません。途中で渋滞に巻き込まれてしまったのです」

② 主張

「これからはあなたたちがこの店をまもり発展させて行くのです」

③ 話題のきっかけ

「先週京都に行ってきたのですが、そこで偶然高橋さんに会いましてね。
相変わらず仕事に励んでいるようでした」

④ ...のですか（*理由の説明）

「どうして彼が犯人だとわかったのですか」

⑤ つまり...のです（*要約）

「締め切りは今月末、つまりあと5日しかないのです」

⑥ だから...のだ (*理由として帰結)

「ずいぶん熱が高いですよ。だから頭がいたかったのですね」

⑦ ...のですから (*理由の提示)

「時間はあるのですから、ゆっくりやってください」

(pp. 470-471 *筆者の追記)

また、山本(2003)は、『みんなの日本語初級 I・II』を使って、「～んです」の用法を次のようにまとめている：

① ある事実が状況や背後にある事情、原因、理由などを相手に確かめたり、問い質したりする場合

「渡辺さんは時々大阪弁を使いますね。大阪に住んでいたんですか」

② 話し手が自分の発言に関して事情を説明したり、付け加えたりする場合。

A: 「運動会に参加しますか」

B: 「いいえ、参加しません。スポーツがあまり好きじゃないんです」

③ 疑問詞と一緒に使って、具体的な情報を得たい場合

A: 「すてきなカバンですね。どこで買ったんですか」

B: 「〇〇デパートで買ったんです」

④ どうして～ですか / ……～です (*理由の説明)

A: 「毎朝新聞を読みますか」

B: 「いいえ、読みません」

A: 「どうして読まないんですか」

B: 「時間がないんです」

⑤ ～んですが、～ていただけませんか (*要望の提示)

「いけばなを習いたいんですが、先生を紹介していただけませんか」

⑥ 状況を説明した後で、助言や支持を求める場合

「金閣寺に行きたいんですが、どのバスに乗ったらいいですか」

(pp. 61-62 *筆者の追記)

また、野田(2002) は「～んです」の用法を「文を先行する文などと関係づける」と「文を先行する文などと関係づけない」という二つの軸を用い次のようにま

とめている：

- ① 文を先行する文などと関係づける - 聞き手に提示するもの
「私、明日来ません。用事があるんです」
- ② 文を先行する文などと関係づける - 話し手が把握するもの
「あいつ、来ないなあ。きっと用事があるんだ」
- ③ 文を先行する文などと関係づけない - 聞き手に提示するもの
「このスイッチを押すんだ」
- ④ 文を先行する文などと関係づける - 話し手が把握するもの
「そうか、このスイッチを押すんだ」 (pp. 231-233)

このように、上に挙げた「～んです」の用法の広がりを見ただけでも、多種に亘る解釈が今までになされていることがわかる。実際に使用される対話の中で、それぞれの使い方の特異性がその文脈や状況によってさまざまに異なってくるからである。

日本語を学ぶ初中級者が、これら多種の用法を持つ「～んです」を習得する際に、「～んです」の発話を促すための前提条件の意味を的確に把握し、実際の対話の中で適切に使用するのは難しくなってくる（菊地、2006: 山本、2003）。発話場面に前もって設定された先行文の意味を的確に把握しながらも、「～んです」を使って自分の言いたいことを言おうとする「発話意図」が明確に想起されなかったり、「～んです」を使う目的がはっきりせず、「～んです」の文末表現を使わずに、ただ「丁寧体（～ます / ～です）」で代用してしまったりするケースが多いのではないかと考えられる。そこで、本大学の留学生に「～んです」の発話を促す前提条件を提示し、実際に「～んです」が使用されたかどうかを見る調査をした。

3. 「～んです」使用の調査

3.1 調査目的

「～んです」が自然に使われる場面設定をして、学習者がその前提条件である共有情報を理解し、先行文に対応するために「～んです」が適切に使用されるかを調べる。

3.2 調査対象

本大学に 2015 年度秋学期在籍した会話レベル 3、19 人、レベル 4 の留学生、21 人、合わせて 40 人。レベル 3 は一年から一年半の日本語学習経験を持ち、レベル 4 では一年半から二年の学習歴を持つ学生である。

3.3 調査方法

両レベルとも 2015 年度秋学期期末試験の口頭試験の際に、成績には直接関わらない日本語発話練習の一環として行われた。試験官（担当教師）が留学生に「～んです」を用いる場面設定をし、短い会話文を提示し、その発話状況を調べた。留学生は設定された前提条件を独自に解釈し、その先行文に答える対応文を作成し、発表した。完成した会話文を録音、記録して分析した。受験者（留学生）が「～んです」を使用するかしないかを見るために、キューとなる先行文の書かれてある絵カード（英語訳添え）を見せ、受験者がその絵カードを見てその会話を完成するというインタビュー方法を採用した。

採用した場面設定は次の 6 通りである。絵カードにある会話体の先行文はそれぞれ試験管が実際に発話したものである：

- (1) （頭痛で辛そうな人の絵を見せて）

A（友だち）：どうしたんですか。

B（学習者）： _____
(I have a headache.)

- (2) （彼/彼女と別れて涙を流している人を絵をみせて）

A（友だち）：どうしたんですか。泣いていますね。

B（学習者）： _____
(I broke up with my boyfriend/girlfriend.)

- (3) （かわいいドレスを嬉しそうに着ている人の絵を見せて）

A（友だち）：かわいい服ですね。

B（学習者）： _____
(I made it myself.)

- (4) （一生懸命に勉強している学生の絵を見せて）

A（友だち）：よく勉強しますね。

B (学習者) : ええ、あした _____
(There is a test tomorrow.)

(5) (ネックレスを買ってとても嬉しそうな人の絵を見せて)

A (友だち) : あたらしいネックレスですね。

B (学習者) : ええ、 _____
(It was a sale.)

(6) (新しい車を買って嬉しそうな人の絵を見せて)

A (友だち) : いい車ですね。

B (学習者) : _____
(It is a German car.)

受験者に絵カードを見せながら、試験官が会話の先行文を言い、それに対する残りの会話部分を受験者が発話して文を完成させるという記録方法をとった。例えば、(1)「どうしたんですか」(友だち)と試験官が始めれば、受験者がそれに対応して「頭が痛いんです」と答えるという発話状況を想定した。

3.4 調査結果

それぞれの場面設定で発話された文には、次の5通りの対応方法が確認された。

- a. 「～んです」を使用した
- b. 「～んです」の代わりに「～から です(だ) / ので」を使用した
- c. 「～んです」を用いずに、丁寧体(「～ます / ～です」)だけを使用した
- d. 「～んです」を用いずに、普通体(「～だ」)だけを使用した
- e. 会話文が理解できず、無言で応答がなかった。

さらに、それぞれの発話状況を受験者数の割合から比較してみると、次のようになった。(表1、表2、表3)

レベル3、レベル4の受験者では、同じような数の分配が認められた。例えば、両クラスで一番「～んです」の使用が多かったのが、(1)「どうしたんですか」に答える「頭が痛いんです」であり、それに、続くものが(3)「泣いていますね」と(5)「よく勉強しますね」に答える「彼と別れたんです」と「明日テストがあるんです」であった。

表1 レベル3 (19人)

	「～んです」 あり	「～んです」 なし からです (代行)	「～んです」 なし 丁寧体	「～んです」 なし 普通体	応答 なし
I have a headache	15	0	4	0	0
I broke up with my boyfriend	13	1	4	1	0
I made it myself	5	0	10	4	0
There is a test tomorrow	10	4	3	2	0
It was a sale	4	2	11	2	0
It is a German car	2	2	13	2	0

表2 レベル4 (21人)

	「～んです」 あり	「～んです」 なし からです (代行)	「～んです」 なし 丁寧体	「～んです」 なし 普通体	応答 なし
I have a headache	15	0	6	0	0
I broke up with my boyfriend	4	1	9	1	6
I made it myself	3	0	16	2	0
There is a test tomorrow	5	2	14	0	0
It was a sale	1	2	16	0	2
It is a German car	2	2	17	0	0

表3 レベル3&4 (総40人)

	「～んです」 あり	「～んです」 なし からです (代行)	「～んです」 なし 丁寧体	「～んです」 なし 普通体	応答 なし
I have a headache	30	0	10	0	0
I broke up with my boyfriend	17	2	13	2	6
I made it myself	8	0	26	6	0
There is a test tomorrow	15	6	17	2	0
It was a sale	5	4	27	2	2
It is a German car	4	4	30	2	0

3.5 調査分析

3.5.1 絵カードで描写された前提条件がわかりやすいもの

「～んです」の使用が一番多く認められたのは、(1)「どうしたんですか」という質問文に答える「頭が痛いんです」であった。これは、絵カードで描写された頭痛で苦しむ人の絵がわかりやすく、質問文である「どうしたんですか」もわかりやすい質問だったために、多くの学生が「頭が痛いんです」と答えたものと考えられる。

さらに、質問文のなかに「～んですか」の使用が認められていたので、その質問文にある「～んです」に自然に対応したのではないかと考えられる。

3.5.2 絵カードで描写された前提条件が「理由」を述べるもの

(1)「頭が痛いんです」も含め、先行文に対応する文に「理由」を述べる「発話意図」を持つものに「～んです」の使用が多くあった。(2)「泣いていますね」の返答に「彼/彼女と別れたんです」と答え、(4)「よく勉強しますね」の返答に「あしたテストがあるんです」と答えている。絵カードに見られる前提条件としての先

行文の理解から、なぜそういう状況になっているのかという「理由」を述べる話し手の「発話意図」が想起されたものと考えられる。

「～んです」の発話とその前提条件との繋がり、その場面設定から「理由」を述べるときに「～んです」が多用されることが確認された。それは、「理由」を述べる「～からです」が「～んです」の代わりに使用されたことから、「理由」を伝えるための「発話意図」だったことが窺える。

3.5.3 付加的情報として「説明」を添えるもの

前提条件としての先行文への対応に、付加的な情報を添えて、さらなる「説明」を加えようとする文には「～んです」の使用は多く認められなかった。例えば、(3)「かわいい服ですね」への対応には「自分で作ったんです」とする付加的な「説明」を述べるという「発話意図」は想起されなかったようだ。他の(5)「あたらしいネックレスですね」に対する応答でも「ええ、バーゲンだったんです」という「説明」を添える文は少なかった。同じく(6)「いい車ですね」に対しても「ええ、ドイツの車なんです」という「～んです」を使う返答は多く確認されなかった。

3.5.4 丁寧体「～ます」が「～んです」の代用になる

(1)「どうしたんですか」という質問文に対応する「頭が痛いんです」、さらには(2)「泣いていますね」に対応する「彼/彼女と別れたんです」とする「理由」を述べる「～んです」の使用に、「～んです」を用いずに「丁寧体(～ます / ～です)」で答える受験者が多かった。例えば、「どうしたんですか」に対して「頭が痛いです」、また、「泣いていますね」に対して「彼/彼女と別れました」という返答である。これは「理由」を述べるための「～んです」の使用の代わりに「～ます / ～です」を使って、同じように「理由」を述べようとする「発話意図」の試みだったのでないかと考えられる。

「～んです」の使用が難しいという事実を踏まえて、教師は日ごろから「～んです」を使わずに、学習者が使いやすい「～ます / ～です」を代用してしまい、その「理由」を述べるという習慣がクラス内で出来上がっているのかもしれない。

例えば、京都のお土産を嬉しそうに持っている学習者に向けて、教師が「京都に行ったんですか」と問えば、自然な日本語になるが、「～んです」の使用が難しいということを踏まえて「京都に行きましたか」と「～ます」を使って質問をしてしまう。このティーチャートーク (teacher talk) の「京都に行きましたか」という文で、「(京都のお土産を持っていますが、そのお土産を持っている理由を問うために) 京都に行ったからですか」という「発話意図」を含めて「京都に行きましたか」と質問してしまう。学習者をこの場合の「～ます」が自然な日本語であると誤認してしまう。

以上の調査結果からも確認されたように、「～んです」の発話が起こるためには、その発話場面で設定された共有情報の理解が重要になってくる。受験者は教師側が設定した共有情報を的確に把握し、その期待に応えられる「発話意図」を想起した場合にのみ「～んです」の発話が起こるようである。この共有情報の理解と「～んです」の使用の関係を考えてみようと思う。

4. 「～んです」の使用が起こらない理由

日本語を学ぶ学習者にとって、「～んです」の使い方が十分に理解できない理由の一つに、日本語研究者や教科書執筆者による「～んです」の分析自体が十分でないということが挙げられる (菊地、2000)。

4.1 「説明」のモダリティー

まず第一に、「～んです」の使い方が難しくなる最大の理由は、学習者にとって「～んです」の用法解説の意味を的確にとらえることが難しいことが考えられる (藤城、p.68)。ほとんどの教科書が「説明」(explanatory mode)²という解説がなされていて、「～んです」使用のない「～ます」述語文との比較を行っている。例えば、

(1) 雨が降っているんです。

(2) 雨が降っています。

(1)の文と(2)の文を比較して、(1)の文では「雨が降っている」という事実・状況に

「説明」を加えているという解説になる。これだけでは、何を「説明」しているのか、その「説明」される情報の内容が判断しにくい。

この「説明」という解説は日本語学の「説明のモダリティー」という長年研究された結果、採用されたものである（益岡、2007: 田野村忠温、2002: 名嶋義直、2007）。話者の感情を文の最後に付け加えたいというモダリティーの「のだ（んです）」の発想である。「説明のモダリティー」に関しては多くの研究者によってこれまでさまざまな意見が展開され、統一された解釈と言うものがない（野田、2002）。この「説明」という解説を用い、学習者に「～んです」の使い方を教えるにはあまりにも漠然としていて、わかりにくいものになっている。

4.2 「理由」のモダリティー

それならば、「説明」するという意味に「理由を説明する」とする「理由」に焦点を当てる解説もある。例えば、

(3) (傘を手にしてしている状況) 今朝、雨が降ったんです。

(4) 今朝、雨が降りました。

(3)の文と(4)の文を比較して、(3)の文では、なぜ今傘を持っているかという「理由」を述べているという解説である。(4)では、ただ「雨が降った」という事実を述べているだけである。ただ、この「理由」に焦点を当てる解説でも、「理由」に拠らない「～んです」の使い方もある。例えば、

(5) (新しいネックレスを身に付けて) バーゲンで買ったんです。

(6) バーゲンで買いました。

この「～んです」の使い方は「理由」では説明できない。これはさらに、「付加的情報」という解説が必要になってくる。「ネックレスを買った」という事実「バーゲンで買った」という情報を付加的に添えている。

以上からわかるように、「説明」による解説だけではあまりにも漠然としていて、「～んです」の用法を正確に伝えることができず、また一方で、「理由」とする解説だけでは意味が狭すぎて「～んです」用法の多様性に適していない（藤城、2010）。

4.3 前提条件としての共有情報

「説明」のモダリティー、「理由」のモダリティーには触れず、話し手と聞き手が有する前提条件としての共有情報に焦点を当てて解説しているものもある。

「～んです」がその場の状況で適切に発話されるためには、話し手と聞き手の間に、その発話に先立つ関連する共有情報が存在していなければいけない。言い換えれば、発話に先立つある事実や状況の背後にある事情・原因・理由などを把握しなければいけなくなる（山本、p. 60）。ただ、この背後にある情報が共有されない場合、あるいは、違った解釈がなされた場合は「～んです」の使用が起こらない。例えば、

(7) (聞き手が突然日本語で話し出す) 日本語ができるんですか。

(8) (聞き手が突然日本語で話し出す) ?日本語ができますか。

聞き手が突然日本語を話し出したという状況を共有情報として把握すれば、やはり(7)の文のように「日本語ができるんですか」という「～んです」を使う方が自然な会話になる。(8)の文では、発話に先立つ共有情報に関わらず、ただ事実として日本語ができるかできないかを問う質問文になっている。

前提にある情報を共有して、話し手は何を伝えたいかを明確にする必要がある。この共有情報から想起される発話意図がはっきりしていなければ、「～んです」の使用は難しくなる。つまり、(7)では、「突然日本語を話し出した」という共有情報に拠って聞き手は日本語ができるということを確認したいという発話意図が喚起されたわけである。

4.4 共有情報の役割

菊地(2000) は「～んです」が使われる対話場面の前提条件として、話し手と聞き手もつ共有情報について、「理由の説明」と「背景の説明」、「用件を切り出す場合」にわけその役割を説明している。それぞれの「～んです」の用法を比較しながら、そこに存在する共有情報の重要性を強調している。例えば、

① 理由の説明 (質問文がある場合) :

A: 「どうして遅れたんですか」

B: 「バスが来なかったんです」

ここでは、B が遅刻したという事実が共有情報として A と B に確認されている。つまり、A も B も「B が遅刻したこと」を知っている。菊地はこの場合の「～んです」の用法を次のように説明している。

これは、「なぜ B が遅刻したのかということが A の関心事となるわけだが、その点については B しか知らない。その <あなただけが知っている私の知らない付加的な情報（遅刻の理由）を提示（説明）してほしい> と言うのが「のか（んですか）」であり、それを提示する。つまり、<私だけが知っているあなたが知らない付加的な情報を提示する> 場合の述べ方が「のだ（んです）」である。(pp. 30-31)

② 理由の説明（質問文がない場合）：

「C さんのパーティーに遅れてしまいました。バスが来なかったんです」
「どうして遅れたんですか」という質問文がない場合でも、B が遅れた理由を述べる必要があると感じた場合は、やはり、「バスが来なかったんです」と「～んです」を用いて遅刻の理由を付加的に提示する。この場合、「バスが来ませんでした」では不自然な日本文が出来上がってしまう。(p. 31)

③ 背景の説明（質問文がある場合）：

A: 「おもしろいデザインの靴ですね。どこで買ったんですか」

B: 「エドヤストアで買いました。スペインの靴です」

(『みんなの日本語 初級Ⅱ 本冊』26課 p.2)

この場合の A と B の共有情報は、B がおもしろいデザインの靴を履いているという事実だ。そこで、A はその共有されている情報を踏まえたうえで、さらなる付加的な情報の提示を要求しているのが「のか（んですか）」になる。この A の要求に応じて B が A が知らないであろう B だけが知っている情報を提示しようとする場合、「背景の説明」を提示することになる。さらに、この場合「エドヤストアで買ったんです」とするほうが自然な日本文になる。

また、

A: 「郵便局に行くんですか」

B: 「ええ、友だちに手紙を出すんです」

(*Situational Functional Japanese*, Vol. 1: Notes, 5 課 p. 124)

この場合の共有情報は B が手紙を持っているという事実であり、この共有情報に基づいて A はその手紙を持って郵便局に行くのかという未知の情報を B から引き出そうとするものである。一方、B はその質問に答えて、A が知らないであろう B だけが知っている情報を提供する状況になっている。

④ 背景の説明（質問文がない場合）：

[ベイリーさんを山田に紹介した後で、スミスが山田に]

「ベイリーさんはこの十二月に日本へ行くんです」

(*Basic Structures in Japanese*, 5 課 p. 55)

この場合、スミスと山田の間の共有情報は、ベイリーさんという人が紹介されたということである。この共有情報に基づいて、スミスはさらに、山田が知りたいかもしれないスミスだけが知っている付加的な情報を提供しようを提示した場合である。ここでは、山田からの質問文はないが、スミスが自主的に付加的な情報を提供しようとした状況であると考えられる。

⑤ 用件を切り出す：

「道がわからないんですが、教えてくださいませんか」

(『しんにほんごのきそ II 本冊』26 課 p. 2)

この場合の「～んです」の用法は、話かける理由を説明するためのものとすることが多い。菊地はこの場合でも「～んです」の用法について次のように述べている。

最も普通には、聞き手のほうに歩み寄りながら発する文だが、その状況（聞き手から見れば、＜誰かが自分に近づいてきた。用があるらしい＞という状況）が、話し手と聞き手で共有されている。この状況に関連して、話し手はなぜ自分はそういう（＝あなたのほうに歩み寄り、話しかけようとする）行動をとるのか＞を説明しているわけで、そのために「のだ」が使われているのだと見られる。(pp. 34-35)

5 共有情報を重視した「～んです」の指導案

5.1 「～んです」の指導の難しさ

第二言語として日本語を学ぶ学習者に、この「～んです」を日本人のように実際の会話で適切に使えるように指導するのは難しい（菊地、2006）。指導が難しくなる要因をまとめてみると次のようになる。

- A) 「～んです」の用法の解説に広がりがあり、多様で共通点が見出しにくい。そのため、教師がどの解説に焦点を当てて説明すればいいのかわからなくなる。
- B) 「～ます」と「～んです」の用法の違いを教師が十分に納得していない。違いが説明できないために、「～です」を使うべきところを「～ます」で代用してしまう。学習者には、この「～ます」で代用されたティーチャー・トーク (teacher talk) が自然な日本語として理解され、「～んです」の使用の役割がわからなくなる。（山本、2003）
- C) 「説明」のモダリティーと称し、「～んです」の日本語学的説明だけに教師が専念し、日本語教育文法という立場で実際にその「～んです」の使い方を体系的に教える方法が確立されていない。

5.2 効果的な「～んです」指導案に必要な要因

5.2.1 「理由」を述べるための「～んです」だけに集中する

今回の調査結果からも明らかになったように、初中級学習者は「理由」を述べたいとする「発話意図」を想起するときに「～んです」を多く使うということがわかった。それならば、多種の用法を持つ「～んです」を網羅的に一度に教え、その習得過程を精査するよりは、もとより、「～んです」を「理由」を提示するためだけの文法項目として教える教授法を提案する。島口(2005) はすでに『できる日本語1』の中で「理由」だけの「発話意図」をもつ「～んです」の導入課を設けている。

「説明」のモダリティーと称して「～んです」の用法解説を概観し、さまざまな「～んです」の使い方をその前提条件との繋がりから導入するよりは、初中級の段階では、まず、「～んです」の形（普通形接続 plain form）の習得の後、「理由」を述べるときに使う場合のみの用法を提案し、その発話場面を導入する方法を提示

する。例えば、先行文として「どうしたんですか」という質問文が自然に使われる場面を設定すれば、その先行質問文に対して、「〇〇んです」「〇〇なんです」と答えることで、「理由」（なぜ、そういう状況になっているかという理由）を述べる「発話意図」が喚起される可能性が高くなるはずである。

「理由」を述べるためだけに使う「～んです」に焦点を当てると、その「～んです」の用法解説の意味が的確に捉えられることができる。学習者にとってもわかりやすい説明となり、教える側の教師も「～んです」と「～ます / ～です」の違いが分かりやすくなり、「～んです」を使う目的をその設定された前提条件から効果的に発話させることもできる。

「～んです」の発話練習に「どうして」で始まる疑問文で始めるべきだと提案する日本語学者もいる（藤田、2000）。「どうして」で始まる疑問文で「～ます」を使うと不自然な日本語になるとするものである。例えば、「どうしてパーティーに行きませんか」という日本語よりは、「どうしてパーティーに行かないんですか」（p. 165）とするほうがより自然な日本語になるというものだ、実は、この「～んです」の教授試案も、「～んです」の用法を「理由」を述べる時だけに限った方が自然な練習ができると判断しているものである。「～んです」の使い方が多岐に亘るゆえに、まず「理由」を提示するための「発話意図」から始めるという考えが提案されている。

「～んです」の「理由」を述べる用法以外の使用例に関しては、さらに中上級レベルで導入する教授案がある。実際、庵、三枝（2013）は上級学習者に向けて「～んです」を「まとまりを作る表現」として教える教科書を刊行している。そこでは、さまざまな発話場面を疑問文・否定文におけるもの、平叙文において前の文の理由を表すもの、現場の状況を解釈するものなど、いくつかのまとまりにして「～んです」の習得を図っている。

また、島口（2011）『できる日本語 1』で「理由」を述べる「～んです」を導入し、『できる日本語 2』（2011）では「付加的説明」文を添える「～んです」の指導を進めている。「理由」を述べる「～んです」の定着をまず図ったうえで、他の用法の紹介を進めている。

5.2.2 発話意図を完全な形で想起させる

「～んです」の適切な発話には、その前提条件となっている話し手と聞き手が共有している情報が重要になってくる（菊地、2000）。話し手と聞き手との間で共有情報の誤解があった場合は「～んです」の発話は期待できない。つまり、先行する文の意味をその共有情報から理解することが重要になる。例えば、「どうしたんですか」という先行質問文に対して、「理由」を述べるために使う「～んです」の発話を促すためには、その前提条件の中で、そういう状況（「どうしたんですか」と尋ねられるほど、苦しい顔をしている）から、なぜ、その状況（苦しい顔をしている）になった「理由」を述べる必要性が喚起された「発話意図」を作り出すものがないといけない。

「理由」を述べるためだけに使う「～んです」を導入する場合、その「理由」を述べなければいけない具体的な発話場面を設定する必要がある。「どうしたんですか」という先行文では、前提条件をして共有された情報から、なぜ、そのような状況（例えば、苦しんでいる）になっているのかという「理由」を問う質問であることを確認する。そして、その「どうしたんですか」に答えるためには「～んです」を文末に付けて「○○んです」「○○なんです」として「理由」を提供するという自覚が必要になる。「～ます / ～です」だけの文では、その「理由」を問うたり、提供したりするという機能が備わっていないことを確認する。そのうえで、なぜ「～んです」が必要になってくるかというその発話練習の目的を明確にする。

実際の教室活動では、学習者自身に自分の言いたいことを見出させ、それを本人にいかにも表現させるかというのが最重要課題になる。（細川、2004）「～んです」の発話を促すためには、先行質問文に対して、学習者自身に自分の言いたいことを見出させ、それを「～んです」を使って表現させることが重要になる。言い換えれば、「～んです」を用いて「理由」を述べるという明確な「発話意図」を学習者に想起させる必要がある。

5.2.3 絵を使って共有情報を視覚化する

はっきりとした「発話意図」を学習者に持たせるために、話し手と聞き手が前

提条件として有する共有情報を視覚化することが望ましい。例えば、「理由」を述べる「～んです」では、実際に苦しそうな顔をしている女性の絵を提示すれば、その視覚化された情報を相手に伝えようとする言語化が発生するからである。特に、「どうしたんですか」という先行質問文では、「苦しそうな顔をしています、その「理由」は何ですか」という言語化の背後に潜む何らかの情報を問うことになる。つまり、その視覚化された情報から「○○んです」「○○なんです」と言語化することで、言語の背後にある「理由」を伝える役割を全うしているわけである。

「～んです」の発話を促すための効果的な練習方法に共有情報の視覚化が多く使われている。例えば、「目に見える事態」を絵にして提供するものがある(新屋、1999)。その例として、(1)「一緒に歩いていた二人のうちの一人が急に何かを思い出した」絵、(2)「玄関に出てみると、友だちがあちこちけがをして立っている」絵、(3)「食卓で、一人は元気よく食べているのに、もう一人は食事を前にしているのに食べようとしない」絵などが提案されている(p. 25)。どの絵を使ってもそこに描写されている共有情報から、何らかの状況があり、その状況に至った「理由」を問うたり、提示したりするときの練習方法になっている。

共有情報の視覚化に関して、今村(2007)は「語りかけ度」と「語りかけタイプ」として相手に発話内容をしっかり手渡すというイメージを使った練習方法を提案している。前提条件から想起される「発話意図」を相手に手渡すジェスチャーを用いることで、「～んです」で伝えたい内容を相手に届けることができるという発想である。また、藤城(2010)は「ドアのメタファー」を使った「～んです」の練習方法を提案している。この場合「ドア」は背後にある何らかの状況を見えなくするためのカバーとして捉えられている。例えば、苦しそうな顔をしている絵を提示し、その状況から「どうしたんですか」とする先行質問文が発話される設定を作る。その設定に閉ざされた「ドア」の絵も併用する。その質問文に答える際には、今まで閉ざされていた「ドア」を開けて(「ドア」の向こうには風邪で寝込んでいる絵が描かれている)を提示し、「風邪をひいたんです」と「～んです」を使った文で対応する。その時、今まで、聞き手には知らされてなかった情報(風邪をひいた)という絵が「ドア」を開けることで、聞き手に視覚化された情報が伝わるというもの

である。二つに折れた紙を「ドア」を開けて中の情報を伝えるように開くだけの操作である。その視覚化された情報（「ドア」を開けて、知らされてなかった情報を開示する）を伝えるときに、「～んです」を発話するように指導する。なぜなら、「～んです」には今まで知らされていなかった情報を開示するという役割が備わっているからである。

5.3 「～んです」の指導案のまとめ

「日本語の文法」を網羅的にすべて提示したくなるのは、教師の陥りやすい日本語学の発想であり、学習者に混乱を招いてしまう恐れがある。それよりは、学習者の視点から「日本語の使い方」を教える必要がある（白川、2010）。「～んです」の使用を多く促すためにも、その多岐に亘る用法を網羅的に教えるのではなく、学習者が実際使えるようになるために小出しにして提示する必要がある。「～んです」の多くの用法例の中から、まずわかりやすい「理由」を述べる用法に絞って進める発話練習を提案する。「理由」の「～んです」を使うために、その前提条件となる話し手と聞き手が対面する共有情報を具体的に提示しなければいけない。その共有情報から「理由」を述べる必要性が醸成されて具体的な日本文が喚起されるように指導する。その発話場面で共有される情報から「なぜ」そういう状況になっているのかという「理由」を問うものと、その質問に答える「○○であるから」という「理由」を提示する具体的な日本文の交流が出来上がるように学習者を導く必要がある。

また、その「理由」を伝える前提条件の情報交流に、視覚化された絵を用いることを勧める。なぜならば、「～んです」は言語化されたその下層意識の中に隠された「発話意図」を提示するために用いる言語表現であるからである。そのために、「発話意図」を容易に構築するためにも絵を用いた情報の提示が必要になってくる。さらには、その絵の「発話意図」がはっきり確立されたものを選んで進める必要がある。学習者に自分で「言いたいこと」を見出させ、それを日本文で表現できるように指導するためにも、「～んです」を使って言いたいことは何なのかを常に考えさせる必要がある。

注

1. 日本語研究者の中にはこの前提条件を必要としない「～んです」の使用を挙げる者もいる。野田晴美 (2002) 「第7章 説明のモダリティー」宮崎和人、他 (編) 『モダリティー』(pp. 230-260). くろしお出版。庵功雄 (2013) 『『のだ』の教え方に関する一試案』『言語文化』50, 3-15. 本稿では「～んです」の教え方を主に論ずるので、前提条件のあるなしの比較に関してはまた他稿で論ずることにする。
2. 『続・日本語の教え方の秘訣 上 「新日本語の基礎 II」のくわしい教案と教授法』(1995) pp. 3-13. スリーエーネットワーク
『みんなの日本語 初級 II 翻訳・文法解説 英語版』(1998) p. 12. スリーエーネットワーク
『Situational Functional Japanese Volume 1』(1995) p. 124. Bonjinsha
『なかま 1』(1998) p. pp. 370-373. Houghton Mifflin
『A Course in Modern Japanese』(2002) p. 75. 名古屋大学
『Japanese for Everyone』(1990) p. 85. Gakken
『ようこそ』(2006) p. 259. McGraw-Hill

参考にした教科書 / 引用教科書

- 青木春夫 (他) 『*Basic Structures in Japanese*』 (1984) p. 55. Asian Humanities Pr.
- 島口和子 (2011) 『できる日本語 1』 pp. 206-209 アルク
- 島口和子 (2011) 『できる日本語 2』 p. 50, p. 58 アルク
- 『しんにほんごのきそ II 本冊』(1993) p. 2. AOTS
- 『みんなの日本語 初級 I・II 本冊』(1998) スリーエーネットワーク (編) スリーエーネットワーク
- 『*Situational Functional Japanese, Vol. 1: Notes*』(1995) p. 124. Bonjinsha

参考文献

- 庵功雄 (2013) 「『のだ』の教え方に関する一試案」『言語文化』50, 3-15
- 庵功雄、三枝令子 (2013) 『まとまりを作る表現 - 指示詞、接続詞、のだ・わけだ・からだ』(pp. 46-77). スリーエーネットワーク
- 庵功雄、高梨信乃、中西久美子、山田敏弘 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 今村和宏 (2007) 「『のだ』の発話態度の本質を探る: 『語りかけ度』と『語りかけタイプ』」『一橋大学留学生センター紀要』10, 37-48.
- 菊地康人 (2000) 「『のだ (んです)』の本質」『東京大学留学生センター紀要』10, 25-51.
- 菊地康人 (2006) 「受難の「んです」を救えるか」『月刊言語』35-12, 6-7.
- 砂川友里子、他、(編)『教師と学習者のための日本語文型辞典』(pp. 470-471). くろしお出版
- 白川博之 (2010) 「日本語学的文法から独立した日本語教育文法」野田尚志 (編)『コミュニケーションのための日本語教育文法』(pp. 43-62). くろしお出版
- 田野村忠温 (2002) 『現代日本語の文法 I - 「のだ」の意味と用法』(pp. 5-53). 和泉書院
- 中野友里 (2009) 「『ノダ』に見られる二つの機能」『北海道大学留学生センター紀要』13, 40-57
- 名嶋義直 (2007) 『ノダの意味・機能』(pp. 138-176). くろしお出版
- 野田晴美 (2002) 「第7章 説明のモダリティー」宮崎和人、他 (編)『モダリティー』(pp. 230-260). くろしお出版
- 藤城浩子 (2010) 「ノダの提示方法に関する一案 - メタファーを用いた意味・機能提示」『日本語 / 日本語教育研究』1, 67-84.
- 藤田直也 (2000) 『日本語文法 - 学習者によくわかる教え方』(pp. 163-170) アルク
- 細川英雄 (2004) 「クラス活動の理念と設計」細川英雄 (編)『考えるための日本語』明石書店 pp. 8-43
- 益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティー探究』(pp. 85-108). くろしお出版

山本優子 (2003) 「日本語指導における教材提示の問題 - 『～んです』をめぐって」
『岐阜女子大学紀要』 32, 59-66.

(shikaura@kansai-gaidai.ac.jp)

(ckomura9@kansai-gaidai.ac.jp)